

# MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

35

2010.10.31

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS

富士吉田あれこれ

## 市制祭

昭和26年(1951)に富士吉田市が誕生して、今年で60周年を迎えました。当時、富士上吉田町・下吉田町・明見町の三町が合併して富士吉田市となり、昭和35年(1960)には上暮地が加わりました。市制施行当時、富士吉田市は、山梨県下で2番目の規模となり、それ以降、富士北麓の中核都市として発展してきました。ここで紹介する写真は、昭和26年の市制施行から昭和30年代に写されたものです。そこには人々の活気溢れる人々や町並みが写し出されています。



毎年7月、富士吉田市制祭の花形イベントとして「ミス富士コンクール」が実施されていました。優勝者をはじめとして準ミスや入賞者が市内をパレードしました。写真は市制祭で賑わう下吉田の本町通りを凱旋するミス富士です。



昭和30年代、市制祭のイベントの一つとして、オートバイレースもおこなわれていました。スタート地点を市役所とし、滝沢林道を通って五合目のゴールを目指すラリーでした。

◆レポート

# 平成22年小室浅間神社御更衣祭

## はじめに

今年9月19日(日)、富士吉田市下吉田の小室浅間神社でご神体の「オメシカエ」が行われました。これは60年に一度行われる神事で、神社のご神体を包んでいる着物を着せ替えるというものです。神社では通例、御更衣祭の名称を使用しています。

前回の御更衣祭は昭和25年(1950)に行われました。60年も前のことで前回のオメシカエ

の詳細を知る人もほとんどおりません。そこで神社では、従来の神道の作法にのっとり、今回新しく神事の組み立てを行ったそうです。

御更衣祭はなぜ行われるのでしょうか。小室浅間神社に話を伺ったところでは、ご神体がお召し物を変えることで、神が若返り、力を蓄えるということでした。その神の力はもちろん、

神社の氏子や地域にも還元されることとなります。神と地域のパワーアップを図る行事とでもいうことでしょうか。神が若返るということで似た行事では伊勢神宮の遷宮が、神の住まう社殿を、場所を移して新築し、神の若返りと力の復活を図る神事として有名です。なお、オメシカエの神事は市内新倉の浅間神社でも、5年前の2005年に

われ、やはり60年周期のお祭りとなっています。

60年に一度ということは、御更衣祭に出会うのは、人の一生では一度のことと思われます。この御更衣祭が今年どのように執り行われたのか、その詳細を紹介します。

## 小室浅間神社とご神体

下吉田にある小室浅間神社は、富士山の神をお祀りする神社で、下吉田地区の氏神でもあります。しかし、江戸時代の前半までは、下吉田のみならず上吉田、松山地区も含めての氏神とされ、江戸時代後半も上吉田の人が、子どもの初宮参りに下吉田へ訪れる習慣が残るなど、非常に古い由緒を持っています(『甲斐国志』)。伝説では坂上田村麻呂が東夷を討ち果たし、その縁で大同2年(807)に創建されたとも伝わります(「社記」)。

小室浅間神社の祭神は富士山の女神である木花開耶姫命です。木花開耶姫は「古事記」「日本書紀」にも登場する美しい女神で、江戸時代以降に富士山の祭神としてその名が定着しました。

小室浅間神社のご神体は非公開で、どのようなお姿なのかはさだかではありませんが、同じように富士の神を奉る忍野村忍草の浅間神社や富士河口湖町勝山の浅間神社のご神体が女神の木像であることを考えると、小室浅間神社のご神体も同じような女神の像ではないかと想像さ

れます。また後述するように着せる着物の総丈が40cmほどであることを考えると、ご神体の大きさも40cmほどではないかと思われれます。

そもそも、日本古来の神様というのは、鏡や石や御幣などを依り代にし、具体的な絵や彫刻などで容貌を表現しないものでした。目には見えず、仏像のように人の姿を伴わないと考えられていたのです。そのため、神社ではご神体を公開しないところが多くあります。小室浅間神社では、神に奉仕している官司ですら、御更衣祭以前にご神体を拝見することはできないといわれています。今回の神事でも、夜中にお絹垣という絹の布の垣根でご神体の四方を囲い、人目にふれないようにひっそりとご神体の着物をかえました。



■木花開耶姫の絵札

## 平成22年小室浅間神社御更衣祭

### 御更衣祭の経過①

御更衣祭は【表1】のようなスケジュールで行われました。神事の本番は19日未明の深夜2時に行われますが、その本番に先立ち様々な段取りがあります。また、18日、19日は流鏝馬(別名ウマツバシ)の神事も同時並行で行われ、この二日間、神社は大勢の人でにぎわいました。

御更衣祭ではまず18日の10時半、富士山の登山道二合目の御室浅間神社で、「二合目山宮奉織鎮謝祭」が行われました。これは御更衣祭を執り行うことを二合目の神社の神に報告して感謝する神事です。二合目の御室浅間神社は、平安時代末には存在していたとされる非常に古い富士山の神社です。小室浅間神社では、富士山の山内にあるこの古い神社を山宮、元宮と意識し、その神社に敬意を示してご挨拶するのだといいます。宮司、神職3名、氏子総代9名、総勢13名が滝沢林道をバスで二合目に向かいました。二合目の社の前に、新調した着物の入った箱を置き、幣とご神酒、塩、榊を備え、宮司が祝詞を奏上しました。

その後、バスは上吉田の北口本宮富士浅間神社に降ります。ここで上吉田の浅間さんへの「報告祭」が行われました。こちらも神社の拝殿で、一同そろって神饌をあげ、祝詞が奏上されました。

■表1【平成22年 流鏝馬祭り・御更衣祭日程】

|     | 流鏝馬祭り |                 | 御更衣祭  |                       |
|-----|-------|-----------------|-------|-----------------------|
| 18日 | 10:00 | 山王社奉幣使 参向パレード   | 10:30 | 二合目山宮 奉織鎮謝祭           |
|     | 10:30 | 天神社例大祭          | 13:00 | 北口本宮富士浅間神社 報告祭        |
|     | 11:10 | 天神社出発           | 13:40 | 御神衣送行行列               |
|     | 11:40 | 奉幣使 参向パレード 下浅間着 | 14:10 | 金鳥居市民公園着(休憩)          |
|     | 12:00 | 富士山神輿発輿         | 14:25 | 金鳥居市民公園出発             |
|     | 16:00 | 富士山神輿還幸         | 14:35 | コンビニエンスストア通過(富士山神輿参加) |
|     | 20:00 | 宵宮祭             | 14:45 | 中央通り着(休憩)             |
| 19日 |       |                 | 15:05 | 中央通り出発(稚児本隊参加)        |
|     |       |                 | 16:00 | 小室浅間神社着               |
|     | 10:00 | 流鏝馬祭り例大祭        | 2:00  | 御神衣御召し替え(御更衣祭)        |
|     | 13:00 | 流鏝馬疾走           | 10:00 | 報告祭並びに例大祭流鏝馬祭り        |



■流鏝馬



■山宮奉織鎮謝祭(二合目)



■新調した着物の箱



■報告祭(北口本宮富士浅間神社)

## 御更衣祭の経過②

神事が終了すると、北口本宮富士浅間神社から、新調した着物を納めた輿を中心に御神衣送行の行列が、小室浅間神社を目指します。先頭は神を持った天狗で、袴を着た金棒引きが続き、神職、巫女、着物の入った輿と続きます。宮司、氏子総代は白い馬に乗って後につきます。行列は北口本宮富士浅間神社の参道を抜けてそのまま下り、合同庁舎前で左折して表通り(国道139号線)へ出て金鳥居を潜っていきます。途中、上吉田と下吉田との境にあるコンビニエンスストアで小室浅間神社の富士山神輿が合流します。この神輿は御更衣祭にかかわりなく、毎年の例祭で出輿するものです。また、獅子舞も各戸前で奉納されました。行列は順調に本町通りを下って夕方16時ころに小室浅間神社へ到着しました。そこで着物の輿は拝殿へ安置され、富士山神輿は境内へ納まります。

オメシカエの神事はしばらくしての19日未明、深夜2時から行われました。本殿前には着物が入った輿が置かれています。神職達が幣を払って参列者を清めると、宮司が祝詞を奏上、祝詞が終了すると、白い絹で作った御絹垣で、着物の輿を囲います。その後、御絹垣の中で何が行われたのかは、参列者には見る事ができなくなります。御絹垣の中で、着物が輿から出され、それを持った宮司が本殿の中へ入り、着物を交換したようでした。神事の終了時刻は3時40分。深夜にもかかわらず、氏子をはじめ、100名以上の参列者が拝殿の外から見守り、無事に終了しました。



■行列



■馬に乗る宮司



■富士山神輿



■獅子舞



■輿



■清める

## 平成22年小室浅間神社御更衣祭



■御絹垣



■参列者

### オメシカエの着物

今回の神事に合わせ、小室浅間神社では、120年前、つまり明治23年(1890)に制作された着物を一般に公開しました。当館でも特別に拝見、採寸させていただきました。絹の内着を3枚合わせたうえに綾織地で牡丹紋を織り込んだ打掛を重ねた形で、総丈は約40cmの豪華な着物です。今回、織の柄もまったく同じように再現し、新調されたといいます。

オメシカエの着物の制作は、後述する古記録や新聞などによると、江戸時代から昭和25年までは江戸の白木屋百貨店に頼んでいました。しかし、今回は白木屋がないので、京都西陣の会社に頼み、難しい織模様も再現して作ってもらったそうです。再現には奇跡的に保存されていた写真の着物が見本となりました。



■120年前の着物

### 御更衣祭の古記録

御更衣祭がどのようなきっかけでいつから行われているのかは、さだかではありません。現在確認できる古い記録では、御更衣祭で購入した物品を記した文政13年(1830)「御召替御宮殿入用帳」や、寄付金の詳細を記した同年「御召替奉賀帳」があり、文政13年には行われていたことがわかります(共に下吉田弁天町所蔵)。「御召替御宮殿入用帳」の寄進者名には、「江戸日本橋 白木屋」とあるため、お召し物は、白木屋に注文したようです。また、「御召替奉賀帳」の前置きでは、御更衣祭の主旨を記していますが、それによると、今回の祭事は「今役御召替並遷宮」と記述され、お召し物の交換のみならず、社殿の移設を行ったとも考えられる記載があります。

(高橋 晶子)

# みろくどう 身禄堂の由来と変遷(前)

— 田辺家の御神前ごしんぜんから山元講やまもとこうの身禄堂へ —

## はじめに

平成21年度の12月～2月にかけて、山梨県教育委員会と富士吉田市教育委員会と合同で、身禄堂の調査を行いました。

なお、県教育委員会は、山梨県富士山総合学術調査の上吉田地区御師住宅調査として建造物調査を行ない、市教育委員会は、市内文化財調査の一環として古文書・民具調査及び聞き取り調査を行いました。この調査

で、従来上吉田の富士講「山元講」のお堂として知られていた身禄堂が、かつては御師田辺家の御神前であったことが分かってきました。このレポートは、身禄堂が、時の流れとともに、御師田辺家の御神前という面と山元講の身禄堂という面を併せ持つようになったことを、身禄堂の変遷をとおして見ていくものです。

## 身禄堂と御法会講

身禄堂は、市内上吉田の中宿にある小さなお堂で、表通り(国道139号線)から東へ折れる脇道(通称「学校道」)を入った北側に富士山へ正面を向けて立ち、その東隣には、身禄堂を所有する御師田辺家(屋号は大田辺・玉の坊、江戸時代の御師名は田辺近江)があります。堂内には、富士山七合五勺の烏帽子岩で即身仏(ミイラ)となった

行者である食行身禄像じきぎょうみろくが祀られています(※1,2)。

この食行身禄の法会である「御法会講ごほうえこう」が、中宿の富士講「山元講」により、1月3日には諏訪の森のはずれで、1月26日には身禄堂で行われました(※3)。昭和61年には、今後も長く伝承すべき伝統行事として、富士吉田市無形民俗文化財に指定されています。



■身禄堂



■身禄堂の食行身禄像



■烏帽子岩



■御法会のお焚上げ

## 身禄堂の由来と変遷(前) - 田辺家の御神前から山元講の身禄堂へ -

### 身禄堂の前史

この身禄堂の歴史を追う前に、お堂の名前となっている食行身禄と田辺家の関係を紐解く必要があります。また、身禄堂建立以前にも、田辺家とその檀家の富士講は、身禄を顕彰するために多くの建造物を建立していますので、それらも合わせて見ていきましょう。

田辺家の御師としての初代は、田辺十郎右衛門とよりの豊矩です。享保19年(1734)の『甲州都留郡上吉田村宗門人別帳』(※4)には、中宿西町にある善導寺の檀家として、「重郎右衛門」と名前が見えており、年は56歳とあります。家族は、妻に息子2人と自身の弟1人の5人家族ですが、他に土地を貸している家が3世帯もあり、比較的裕福な家であったようです。この初代十郎右衛門は、富士山八合目で水売りをしていたとされますが、食行身禄が享保18年(1733)に烏帽子岩で入定するため31日間の断食をした際に、その介添えをします。そこで毎日身禄が語る教えを十郎右衛門は書き留め、身禄の入定後にそれを『三十一日の巻』としてまとめ、身禄の遺品も引継ぐとともに、御師株を手に入れた、御師になります。そして、遺

物の拝礼を望んだ多くの富士講社を、自らの檀家とし、新興の御師ではありませんが、急速にその勢力を伸ばしていきます(※5)。なお、この身禄の遺物の一部は、県指定有形民俗文化財「食行身禄の御身扱及び行衣・野袴」に指定されています。

そして、4代目田辺豊久(※7)の時に、特に規模の大きな講社であった江戸渋谷の道玄坂を本拠とする山吉講の先達吉田平左衛門と協力して、田辺家の敷地内に食行身禄を祀る「食行身禄菩薩御供所」を建立することを天明元年(1781)に発願し、寄附を募ります(※8)。この時期が選ばれたのは、翌年の天明2年(1782)が食行身禄の50年の遠忌であり、身禄を顕彰するには一番相応しい年であったからです。そして、同年の芳名簿(※9)には、芝、品川、目黒、下谷、麻布といった町ごとの講社と講員の名前が併記されており、実際に寄附金は集められたようですが、無事に建立まで至ったかは不明です。

なお、これも天明2年ですが、現在、吉田のシンボルとなっている金鳥居についても、その建立を初代十郎右衛門の息子

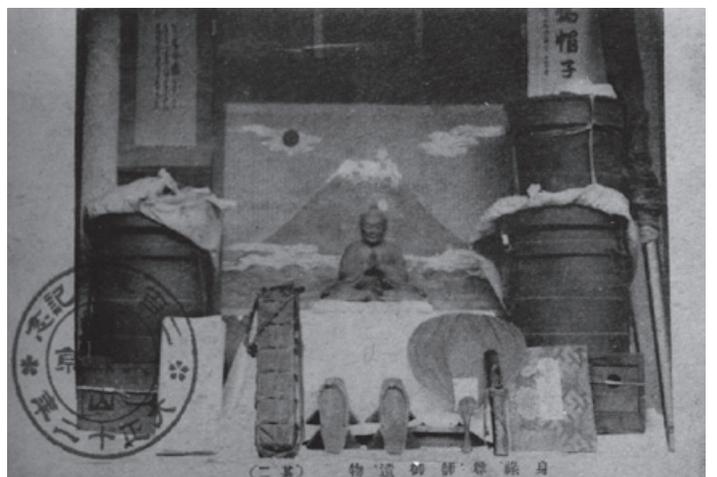
で、御師中雁丸家を継いでいた中雁丸由太夫豊宗とともに願い出て、互いの檀家の支援を得て、天明8年に無事に竣工しています(※10)。この由太夫は、父親と一緒に身禄の入定に付き添った直弟子であり、行名を仙行伸月といいますが、この天明2年の金鳥居建立の発願は、やはり身禄の五十回忌を意識してのものと考えられ(※11)、この年が、身禄の直弟子とその檀家にとって、非常に重要な意味をもっていたことが分かります。

また、初代十郎右衛門は、身禄十三回忌の延享元年(1744)にも、講社の協力を得て、身禄を祀るお堂の建立を行って

り、奉納帳が残されています(※12)。その文中に「石室山元神前建立」とあり、石室が富士山の烏帽子岩、山元が富士山の麓を指すとすれば、前者は、七合五勺で身禄を祀る現在の烏帽子岩神社の前身、後者は、田辺家の身禄堂の前身とも考えられます。いずれも推定にすぎませんが、御神前の建立は成就したとあるため、実際に建立はされたようです。

これらのうち「神前」や「御供所」は、身禄堂とは別の建物ですが、食行身禄を祀る点は共通するため、身禄堂の原点といえるでしょう。

(篠原 武)



■身禄の遺物(海蔵寺の大正12年の絵葉書「食行身禄二百年祭記念」より)※6

(註)

- ※1 食行身禄像は、銘文がないため造立年は不明です。厨子は、御師上司家より昭和60年に奉納されたものです。
- ※2 「延享の初年、上吉田の豊矩の宿坊神殿に、3尺余の身禄立像が講中によって担ぎ込まれ、須弥壇の上へ奉安された。身禄の彫塑としては珍しいこの立像は、惜しくも明治40年上吉田の大火で姿を消してしまっった。」(伊藤堅吉1962『食行身禄のこと』『あしなか』78集)とあるため、それ以後の造立か、寄進の可能性がります。
- ※3 舟久保兵部右衛門「近世富士講と御法会講」(身禄堂内の資料で、市文化財審議会による昭和60年の調査報告書と思われる。舟久保氏は、当時の文化財審議委員です。)
- ※4 田辺四郎家文書(第3次調査)支配No4(東京都立航空工業高等専門学校教授菊池邦彦氏に内容をご教授いただきました。)
- ※5 文化11年「甲斐国志卷之三十五 山川部十六ノ上 富士行者略伝富士一派」(佐藤八郎校訂1968『大日本地誌大系45甲斐国志』第2巻)

※6 『富士講・身禄』(伊藤堅吉氏の調査ノート)

※7 6に同じ

※8 天明元年「食行身禄菩薩御供所建立簿」(渋谷区1981『渋谷区史料集 第二-吉田家文書一』)

※9 天明2年「御供所建立之帳」(同上)

※10 寛政12年「唐銅鳥居再建仕度につき願書」(富士吉田市教育委員会1997『富士吉田市史』史料編第5巻 近世III No.37)

※11 高橋晶子2009「金鳥居-倒壊と再建の歴史-(前)」『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』No.29

※12 延享元年「奉納帳」(註2の文献に翻刻を一部掲載)



## 博物館からのお知らせ

### ● 刊行物のご案内

#### 『富士山道しるべを歩く 改』

富士山叢書の第1集としてご好評いただいていた「富士山道しるべを歩く」、永らく品切れとなっておりましたが、このたび、増補改訂版として地図情報やルートガイド等、内容を新たに刊行しました。

A5版 フルカラー / 107頁 / 220g  
 価格：1,000円



■『富士山道しるべを歩く 改』

#### 『富士の女神のヒミツ』

富士山の祭神としてお祀りされている木花開耶姫にスポットをあてて、子供向けに解説しています。

A5版フルカラー / 34頁 / 65g  
 価格：100円



■『富士の女神のヒミツ』

### ● 博物館実習

8月6日～13日の期間、1名の博物館実習生が学芸員資格取得のため当館にて学んでいきました。  
 桜美林大学 1名



■ 実習風景

## 富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

### ご案内

開館時間 / 午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日 / 火曜日(祝日を除く)、

祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始

観覧料 / 大人 300円(団体 240円)

小中高生 150円(団体 120円)

交通案内 / ●中央自動車道河口湖ICより車で10分

●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分

●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



#### 博物館附属施設

#### 御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005

山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8

TEL 0555-22-1101

観覧料 / 大人100円(団体80円)

小中高生50円(団体40円)

※博物館・富士山レーダードーム館のチケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとわれています。